

マレピトの会「福島を上演する」2017 戯曲③

## 『帰れない2人』

水谷 泉 （路上パフォーマー、かつ泉田の女装した姿）※ 安藤真紀と二役

泉田 佑樹（高校生）

江井 洋子（高校生・路上パフォーマー、水谷の相棒）

安藤 真紀（高校生） ※ 水谷泉と二役

安藤 聡 （真紀の父）

千葉 美鈴（聡の恋人）

高校生 1

高校生 2

バス案内員

警察官

男 1 ※泉田佑樹と二役

男 2

その他、通行人、買い物客など

1

日曜日の午後遅く。

いわき駅東口前。ペDESTリアンデッキ。

通行人が行ったり来たりしている。

デッキの端で、テルミンを演奏している水谷泉。空中で手を震わせて、音を出す。

キーボードで伴奏している江井洋子。

二人の周りには、まばらに人が集まっている。

デッキを歩いていく安藤聡。水谷に目を留める。立ち止まって水谷を見る。  
水谷と江井の演奏が終わる。二人、頭をさげる。

江井「ありがとうございました」

パラパラと拍手が起こる。集まっていた観衆たちが散っていく。  
聡、立ち止まったまま水谷を見ている。  
テルミンを片付けていた水谷、聡に気づく。江井も聡に気づく。  
江井、聡に声をかけようとする。  
聡、無言で会釈し、その場を去っていく。

2

いわき駅前のミスド。  
水谷・泉田佑樹が並んで座っている。向かいには江井。  
水谷は座ったまま。しゃべらない。動かない。

江井「話さないの？」

泉田「誰に？」

江井「警察とか？」

泉田「いいよ別に」

江井「でも、万一のことがあったらさ」

泉田「そんなときはそんなときじゃない？」

江井「なにか起こってからじゃ遅いよ」

泉田「なにが起こるんだよ？」

江井「わからないけど。でも、やっぱ怖いよ」

泉田「大袈裟だな」

江井「どうしてそんな他人事なの？ あんたが脅されてるんだよ？」

泉田「いや。俺じゃないし」

泉田、水谷を示し、

泉田「こっちだろ？ そのメッセ、こっち宛てに来たんだろ？」

江井「どっちもあんたでしょ」

泉田「そりゃそうだけど。一応、別っていうか。こいつはオルターエゴ的なやつだから」

江井「言いたいことはわかるよ。でも、水谷が刺されたら泉田も血流すわけでしょ？」

泉田「そうだけど。…なんか、物騒なたとえだな」

江井「ない話じゃないよ」

泉田「俺ら、演奏中に刺されて死んだりするのかな。…伝説になるかも」

泉田-水谷、黙って顔を見合わせる。

江井「わたし、結構本気で心配してるんだよ」

泉田「…じゃあ、自粛とか、してみる？」

江井「それは…」

泉田「続けたかったら、言わないほうがいい。

…相談しても、どうせ安全が確保されるまで演奏やめろ、って言われて終わりだよ」

江井「そうかなあ」

泉田「こんな話、向こうにとっては面倒くさいだけなんだから」

江井、泉田、黙る。水谷も黙ったまま。

江井「…いったい誰が書いたんだろ？」

泉田「さあ」

江井「さっきじーっと見てた人かな？ あのおじさん」

泉田「どうだろうな」

江井「ちょっと目つきがおかしかったよね？」

泉田「そうか？」

江井「なんの恨みがあるのかね？ ただ、路上で好きな曲演奏してるだけなのに」

泉田「俺がこいつになってるのが、気に入らないんじゃない？」

江井「え？ なんで？」

泉田「女装して化粧してるのが気に入らないんだよ」

江井「なにそれ？ 誰が女装しようが、その人に関係なくない？」

街で誰かが気に入らない服着てるからって、いちいち脅して回るわけ？」

泉田「少しでも変わったヤツ見ると、冷や水浴びせたくなるんじゃないの」

江井「そういうもんかな？」

泉田「冷や水っていうか、むしろ本気で怒っちゃうのかな？」

江井「なにそれ？」

泉田「なんていうか。…見てると、自分がバカにされたような気分になるとか」

江井「意味わかんない。

…特に何か主張してるわけでもないしさ。ただ楽しんでるだけでしょ？」

泉田「…じゃあ、単に俺らが楽しそうにしてるのが気に入らないとか」

江井「自分で楽しいこと見つけて楽しめよ」

泉田「もしくは、こいつに惚れたのか」

江井「好きすぎて、逆にいろいろ許せなくなるパターンだ」

泉田「それはわかるんだ」

江井「いや。あれだよ。ありそうってだけだよ」

泉田「なんかいま動揺しなかった？」

江井「してねーよ」

泉田「そう？」

江井「そうそう。つぎいこう。つぎ」

泉田「つぎ？」

江井「まだ、あるとしたらどんな理由？」

泉田「そうだな。…もしくは。このメッセ、俺が書いたかもしれない」

江井「は？」

江井、水谷、泉田を見る。泉田は黙っている。水谷は元に戻る。

江井「…なんだそれ？」

泉田「意味わかんないよな」

江井「なんで自分を脅迫するわけ？」

泉田「俺もよくわかんないよ。…でも、今だったらやってもおかしくない気がする」

江井「気がするって」

泉田「なんていうかな。最近、俺、どんどん凶暴になってるんだよ」

江井「凶暴って？」

泉田「普段は思ってもないようなことを言ったり書いたりしちゃう」

江井「どんなこと？」

泉田「人をバツサリ切り捨てるようなこと」

江井「どうして？」

泉田「わからない。でも、気づいたらそうなってるんだ」

江井「でも、自分に向けて書くの？」

泉田「自分っていうか。(水谷示し)俺、本当はこいつのこと憎んでるのかもしれない」

江井「え？」

泉田、黙る。水谷は黙ったまま。

江井「…誰かに相談したら？」

泉田「…誰に？」

江井「カウンセリングとか。そういうの」

泉田「…やっぱそうかな？」

江井「気になるなら行ってきたほうがいいよ」

泉田「どっか知ってる？」

江井「知らないけど、調べるよ。いわきがいい？ 地元にする？」

泉田「…うーん、やっぱいい」

江井「え？」

泉田「それよりさ。今日これからどこ行く？ 終バスまで遊んでくださる？」

江井「遊んでくけどさ。本当にいいの？」

泉田「なにが？」

江井「カウンセリング」

泉田「いいよいいよ。もうちょっと様子見る」

江井「そっか…」

江井、黙る。泉田、江井を見て、

泉田「ごめん。さっき俺、ちょっと話盛ったかも」

江井「なんだ」

泉田「実は、言うほど深刻じゃないんだ」

江井「ならいいけど…」

泉田、江井、それぞれ携帯で周辺の地図を見始める。水谷はしゃべらないし、動かない。

## 2

下神白海岸近くのスーパー。

店内を買い物客たちが行き来している。

品出しをしている千葉美鈴。

聡がやってくる。棚に並んだ商品を見て回っている。

聡、千葉を見つけて、近づいていく。千葉、気づかず品出ししている。

聡 「…あの。アスパラがないんですが。在庫切れですか？」

千葉「アスパラガスは青果のコーナーに」

聡 「いや。お菓子のアスパラ。黒いゴマが入ってる」

千葉「ああ。そっちのアスパラね。ちょっと待ってください」

千葉、顔を上げる。聡を認める。

千葉「なんだ。聡さんか」

聡 「時間作れる？」

千葉「いま？」

聡 「できれば」

千葉「…（時計見て）外で待ってて」

聡 「わかった」

聡、棚を冷やかしつつ店内を歩いて行く。

千葉、品出しを切りのいいところまで終える。

品出し用のカートを押して、バックヤードへ。

#### 4

下神白海岸。日が暮れていく。

聡と千葉、堤防から砂浜に下りる階段に腰掛けている。黙ってお菓子のアスパラを食べている。

砂浜を歩いていく高校生1、2。

高校生1 「ここで、よく焚き火したって」

高校生2 「へえ」

高校生1 「廃船が放置されてて、その木材使ってたって」

高校生2 「廃船って。ここに？」

高校生1 「うん。この砂浜にさ。ずら一つと廃船が並んでたんだって」

高校生2 「ふうん。それって、どれくらい前の話？」

高校生1 「20年前…って言ってたかなあ？」

高校生2 「じゃあ、小さい頃ここ来ても、見てないね」

高校生1 「うん」

高校生2 「見てみたかったな」

高校生1 「ここから持ってた廃船が、回廊美術館にあるらしいよ」

高校生2 「それどこ？」

高校生1 「え？ 知らない？」

高校生 2 「うん。知らない」

高校生 1 「今度、一緒に行こっか？ …ちょっと遠いけど」

高校生 2 「うーん。二人だけ？」

高校生 1 「…誰か他に誘ってもいいよ」

高校生 2 「考えとく」

高校生 1、2、歩き去っていく。

その様子を見ていた聡と千葉。

千葉 「…やっぱり、学校でいじめとかあるのかな？」

聡 「どうだろうね」

千葉 「ニュースで聞くじゃない」

聡 「それは、直接真紀に聞いてみないとわからないよ」

千葉 「にしても、急すぎるでしょ？」

聡 「そうだね。いきなり電話来てびっくりした」

千葉 「やっぱり、なにかあったんだよ」

聡 「でもなあ。…ただ単に、ちょっと家を離れたくなっただけかもしれないし」

千葉 「そういう気持ちは、わからなくないけど」

聡 「だろ？」

千葉 「ただね。そういう時、わざわざ単身赴任してる父親のところに来るかな」

聡 「うーん。来るんじゃないのか？」

千葉 「むしろ遠ざけるような気がするけど」

聡 「そうか？」

千葉 「だって絶対来た理由聞かれるじゃない？」

聡 「まあ、そりゃ聞くよな。一応、こっちも親だしね」

千葉 「きっと、他に行くところがないんだよ」

聡 「うーん…」

聡、立ち上がる。

聡 「そういうわけでさ。悪いけど、しばらくウチには帰らないでほしいんだ」

千葉 「わかった」

聡 「たぶん2、3日で帰ると思う」

千葉 「うん。でも、わたしは娘さんがいたいだければいいと思うよ」

聡 「向こうの生活もあるし、そういうわけにもいかないよ」

千葉「そりゃ、そうだけど」

聡、階段を降りて、砂浜の流木を拾う。それを見ている千葉。

聡 「団地のほう、帰れる？ もし無理なら、ホテルとってでもいいよ。…俺出すし」

千葉「そっちは気にしないで」

聡 「遠慮するなよ」

千葉「わたしのほうはなんとかできるから」

聡 「そうか。でも、なんかあったら言ってくれ」

千葉「ありがとう」

聡 「…あと。そうだな。美鈴さんの荷物とか、片付けておくから」

千葉「別にいいけど。結局すぐにバレると思うよ」

聡 「なにが？」

千葉「誰か知らない女と一緒に住んでるって」

聡 「あいつ、そんな勘いいかな？」

千葉「バカにしないほうがいいよ。もう高校生なんでしょ？」

聡 「そうだけどさ」

千葉「きっと、わかるよ」

聡 「…まあいいよ。バレたとしても隠すのが、親の務めだから」

千葉「そうなのかな？」

聡 「少なくとも、いまのところはね」

千葉、時計と見て、立ち上がる。

千葉「もう行かなくちゃ」

聡 「うん。ありがとな」

千葉「あとで連絡するね」

千葉、階段上って、道を歩いていく。聡、拾った流木で砂いじりする。

5

宵の口。いわき駅東口前。ペDESTリアンデッキ。

通行人が行ったり来たりしている。

泉田がデッキの欄干にもたれて（江井を待って）いる。



長距離バス乗り場から階段を上り、デッキを歩いていく安藤真紀。大きなバッグを抱えている。真紀は水谷にそっくりである。

泉田、歩いていく真紀に気づいて、驚く。見つめる。  
真紀、立ち止まり、あたりを見回す。泉田の視線に気づく。  
泉田、真紀に声をかけようとする。

そこに、聡がやってくる。

聡 「真紀」

真紀、聡に気づく。近づいていく。  
聡、真紀のから大きな荷物を受け取る。二人、並んで駅ビルの中へ。

泉田、棒立ちになって聡と真紀を見ていた。  
そこへ、江井がやってくる。

江井「ごめん。トイレ混んでて」

泉田、黙って真紀の去っていったほうを見つめている。

江井「どうしたの？ カラオケ行こうよ」  
泉田「…俺、やっぱりカウンセリング受けたほうがいいかも」  
江井「え？ なに？」  
泉田「…病院とか、調べたい」  
江井「なにかあったの？」  
泉田「…ドッペルゲンガー？」  
江井「は？」  
泉田「なんでもない」  
江井「そうは見えないけど…」

泉田、黙っている。通行人が横を通り過ぎていく。

江井「…とりあえず図書館行こう。ネットも使えるから。そこで調べよ。ね」  
泉田「…そうだね」

江井、泉田、ラトブ方面へ歩いていく。

6

いわき駅ビル。ドトール。夜。

カウンターに並んで座っている聡と真紀。

カウンター外の窓からは、駅前デッキの様子が一望できる。

聡と真紀、デッキを眺めながめている。

聡 「…母さんには電話しといたからね」

真紀、答えない。

聡 「あとで自分から連絡とるんだよ」

真紀、答えない。

聡 「そんなに長くは泊められないからね」

真紀、答えない。

聡 「…話したら？」

真紀「何を？」

聡 「…向こうが居づらいのか？」

真紀「やめてよ。そんな質問」

聡 「気になるんだよ」

真紀「そう言うけどさ。一応、聞いてみた、みたいな感じじゃない」

聡 「そんなことないよ」

真紀「私に興味ないならいいよ。2、3日泊めてくれればそれで」

聡 「そんな言い方するなよ」

真紀「でも、お父さん。いますごく居づらそうだよ」

聡 「そうか？」

真紀「私にはそう見える」

聡、答えない。

真紀「わたしと一緒にいるの嫌？」

聡「そんなわけないだろ」

真紀「わたしと一緒にいるの怖い？」

真紀「なに言ってんだよ。お前は俺の娘だ」

真紀「なんかそれ、娘っていう言葉でごまかしてるみたい」

聡「わかったようなこと言うな」

真紀、答えない。

聡「ごめん」

真紀「…うん」

二人、黙る。

聡「…怖くはない。でも、正直戸惑ってるところはある」

真紀「家出したから？」

聡「いや、そうじゃなくて。いや。もちろん、それもあるけど」

真紀、黙っている。

聡「…ただ、時間が経ったんだなって思ってた」

真紀「時間って？」

聡「母さんたちを避難させることにして、

父さんだけこっちで暮らそうって決めた時、真紀はまだ小学生だったからさ」

…真紀、もう高校生なんだよな」

真紀「いまだって、ひとつきに一回は会ってるでしょ？ こないだウチ来たじゃん」

聡「そうなんだけどさ」

真紀「ようやく実感したの？ …時間が経ったって」

聡「いや。本当は、まだ実感してないかも」

真紀「なんとなく、そんな気がするだけ？」

聡「うん。そうなんだ。きっと」

真紀「…実感するころには、時間はもっと経ってるね」

聡「結局、いろいろ追いついてないのかもしれない」

二人、沈黙。

真紀「だから、お父さんは居づらそうなんだね」

聡、黙ったまま真紀を見る。

真紀「自分といまと、距離が開きすぎるとね。居場所がどんどんなくなっていくんだよ」

聡、答えられない。

真紀「そのうち、息するのも苦しくなって。生きるのが嫌になるんだって」

聡 「…真紀。お前、そんなこと考えてるのか？」

真紀「これは受け売り」

聡 「誰の？」

真紀「友達が言ってたの」

聡 「…その友達は？」

真紀「いまどこでなにしてるのか知らない」

聡、聞こうとしてやめる。

二人、黙ったまま窓の外を眺めている。

7

ラトブ5階・いわき総合図書館。夜。

利用者たちが各々本を読んでいる。

インターネットコーナーでカウンセリングについて調べている江井。

江井からやや離れて、パソコンに向かっている泉田。

水谷が泉田の背中合わせに座っている。パソコンに向かっている。

水谷「ねえ」

泉田「…なに？」

水谷「君さ、よくこんなひどいこと書けるね」

泉田「え？」

水谷「他人のことをあーだのこーだの。こうすべきすべきじゃない、なんてさ」

泉田「なに見てんだよ？」

水谷「君の書き込み」

泉田「そんなもん見るなよ」

水谷「気になるじゃん」

泉田「なんで？」

水谷「君が私のこと、脅迫してるかもしれないでしょ？」

泉田「…あれって、やっぱり俺が書いたのかな？」

水谷「知らないよ」

泉田「俺じゃないといいんだけど」

水谷「…誰だろうとよくないよ」

泉田「でもさ。どのみち、世の中から脅迫みたいなものはなくなるわけだから」

水谷「じゃあ、脅迫される前提でいちいち行動するの？」

泉田「仕方ないよ」

水谷「仕方ないって言ってるうちに、君も、そういう言葉しか話せなくなっちゃうよ」

泉田「そういう言葉って？」

水谷「人をバツサリ切り捨てるような言葉」

泉田「ああ。それね」

水谷「しゃべれなくなるんだよ」

泉田「…ああいう言葉って、単純に気持ちいいんだよね」

水谷「どんなところが？」

泉田「言ってやった感っていうのかな？」

ぐずぐずした怒りが快感に変わるんだよ。めっちゃ難しいクイズ解けたみたいな感じで」

水谷「そんなのクイズでいいじゃん」

泉田「…そうかもしれないけどさ」

水谷「君がやってることはさ、自傷行為だよ。自分を切り捨ててんだよ」

泉田「だとしたらなんだよ？」

水谷「君はなにがしたいの？」

泉田「うるさい。お前、ちょっと黙れ」

水谷、黙る。

泉田「なんで自分に説教されなきゃいけないんだよ」

水谷、黙っている。

泉田「…江井にさせられて、女装なんかするんじゃないかった。

女子二人に見えた方がファンつくかも…とか言って。単にあいつの趣味だろ？」

水谷、黙っている。

江井が慌てて席を立ち、やってくる。泉田の肩をたたく。泉田は気づかない。

泉田「…水谷。お前は、なにがしたい？」

水谷、泉田の方へ振り返り、

水谷「ねえ。江井さん呼んでるよ」

水谷、立ち上がって去っていく。

泉田「…え？」

水谷、後ろを振り返る。水谷はいない。

江井が泉田の肩をずっと叩いている。泉田、気づく。

江井「泉田、バスやばい」

泉田「なに？」

江井「バスだよ！ 終バス！」

泉田、パソコン画面で時刻を確認する。

泉田「げ！」

泉田、慌てて席を立つ。

駆け出す泉田と江井。

とおりがかりの人に注意される二人。構わず駆けていく。

8

いわき駅前東口。夜。ラトブ方面から、水谷が歩いてくる。

\*

いわき駅前西口。深夜。鹿島街道方面へ、真紀が歩いていく。

鹿島街道沿い。いわき平のデニース。深夜。

テーブルについている泉田と江井。二人ともスマホを見ている。

他に数組の客がいる。端の席で、千葉が一人、本を読んでいる。

店員が行ったり来たりしている。

江井「あー」

泉田「なに？」

江井「明日一限、数学小テストだー。準備してねー」

泉田「…ごめん。悪かったよ」

江井「あ、いや。そういう意味じゃなくて」

泉田「俺がウカツだった」

江井「もういいって」

泉田「すまん」

江井「…それよりどうする？ もうすぐ10時になるけど」

江井、店員を見る。店員、通り過ぎていく。

泉田「大学生風に、ここに居て当たり前って顔してればバレないよ。」

江井「それ、どんな顔？」

泉田「とにかく、声かけられるまでは粘る」

江井「追い出されたら？」

泉田「ヒッチハイクするか？」

江井「えー、怖いよ」

泉田「粘ってどっか入れてくれる店、探そう」

江井「…うーん。いまのうちに寝とく」

江井、テーブルに突っ伏す。江井を見る泉田。

泉田「江井、聞ってる？」

江井「うーん…」

泉田「来週からさ、路上で演奏するの、やっぱりやめないか？」

江井、答えない。

泉田「脅迫とかもあったしさ。確かに物騒だもんな」

江井、答えない。

泉田「俺さ。…正直、なんでこんなことやってんのかわかんなくなっちゃって」

江井、答えない。

泉田、コップを取って立ち上がる。

泉田「…なんか飲み物いる？」

江井、答えない。

泉田、江井の肩を揺する。寝てしまっている。

泉田「なんだ。寝たのか」

泉田、ドリンクバーへ。

ドリンクバーでは、千葉がコーヒーを入れている。

千葉、自分の席に戻る。本を広げる。

入口から、真紀が入ってくる。店内を見回す。

泉田、真紀を見て驚く。真紀に声をかけようとする。

真紀、泉田に構わず、千葉の席まで歩いていく。千葉の前に立つ。

真紀「あなたが美鈴さん？」

千葉「なに？」

真紀「わたし、安藤聡の娘です」

千葉「ああ。こんばんは」

真紀「あなたが父に送ったメッセージ見ました。あなたの顔も、携帯で確認しました」

千葉「聡さんの携帯、盗み見たの？」

真紀「あんなメッセージみたら、気になるでしょ？」

千葉、黙って真紀を見る。

真紀「あそこには帰りたくないから、やっぱりファミレスにいます…なんて書いて」



千葉「聡さんは？」

真紀「寝てます」

千葉「そっか。そういえば明日早番だったね」

真紀「父と一緒に暮らしてるんですか？」

千葉「座ったら？」

真紀、千葉の向かいに座る。

泉田、千葉の近くの席に身を潜め、真紀と千葉の様子を伺っている。

真紀「…一緒に暮らしてるんですか？」

千葉「うん」

真紀「どれくらい前からですか？」

千葉「それ聞いてどうするの？」

真紀「いいから答えて」

千葉「…一緒に住み始めたのは半年前くらい」

真紀「会ったのは？」

千葉「なんか、尋問みたい」

真紀「答えてください。どこで会ったの？」

千葉、黙って真紀の顔をじっと見る。

千葉「…会ったのは1年くらい前かな。…あ、もっと前から会ってはいたか。

お父さん、バスの運転手でしょ。原発とこっちをいたりきたりする。わたし、聡さんがよく寄るコンビニの店員やってたの。…だから、名前知ったのは後だけど、もともと顔見知りだね」

真紀、黙っている。

千葉「なれそめはそんな感じ。…満足した？」

真紀、黙っている。千葉も黙る。

真紀「…父に家族がいることは知ってたの？」

千葉「うん」

真紀「どうしてこんなことするの？」

千葉「こんなこと？」

真紀「だって、わかるでしょ？ 父に家族を裏切らせてるって」

千葉「…わかるけど、仕方なかったの」

真紀「仕方なかった？」

千葉「いろいろあって、わたしたち二人で決めたの」

真紀「決めたって言っても…」

千葉「ちゃんと覚悟はあるよ」

真紀「だったら母にも言うべきじゃないじゃない？ 覚悟したんなら」

千葉「もちろん、それは考えてる。時期が来たらね」

真紀「なにそれ？」

千葉「いまはちょっと、難しい時期なの」

真紀「都合いいよね…」

千葉「なに？」

真紀「父のことも、私たち家族のことも利用してるだけじゃない」

千葉、答えない。

真紀「あなたは父の隙間に都合よく居座ってるだけに見えるよ」

千葉「…都合よく居座って何が悪いの？」

真紀「え？」

千葉「だって、他に居るところがないんだから」

真紀、答えない。黙っている。

千葉「どこかに居場所がなきゃ、生きていけないじゃない

ないなら無理にでも作ってくしかないじゃない。…仕方ないじゃない」

真紀、立ち上がる。

真紀「…失礼しました」

真紀、千葉に一礼する。

真紀「でも、このことは母に話します。家族の問題でもあるので」

千葉「勝手にすれば」

真紀「…ホント、勝手ですよ」

真紀、足早にファミレスから出て行く。

真紀と千葉の様子を伺っていた泉田、立ち上がって江井のいる席へ。

泉田、江井を揺すって、

泉田「江井…江井！」

江井、起き上がる。

江井「え？ なに？」

泉田「俺、ちょっと出てくる」

江井「え？ なになに？」

泉田「すぐ戻るから」

泉田、店の外に駆け出していく。

江井「え？ なになになに？」

千葉、携帯取り出して、電話をかける。

千葉「あ。聡さん。…うん。真紀ちゃんね。わたしのとこきたよ。聡さんの携帯見たんだって。

探してるの？ …ごめん、いま出てっちゃった。…怒って出て行っちゃった。ごめんね」

千葉、通話を切る。携帯をテーブルに置く。

本を読み始める。

しかし、すぐ腕をテーブルに投げ出して、突っ伏す。

大きく息を吐く。

10

いわき駅東口前。ペDESTリアンデッキ。深夜。

泉田、走ってやってくる。デッキで立ち止まり、あたりを見回す。

泉田、やって来た方に戻る。

泉田が去ると、反対側から真紀が歩いていく。

そこへ、聡がやってくる。

真紀、聡に気づいて立ち止まる。

聡 「真紀」

真紀、黙って聡を睨んでいる。

聡 「帰ろう」

聡、真紀に近づいていく。真紀は立ち止まったまま。

聡、真紀の腕を取る。

真紀は抵抗しない。聡を睨んでいる。

聡 「いいから帰ろう」

聡、真紀の腕を引っ張る。真紀、動かない。睨んでいる。

聡、真紀を見る。

二人、黙っている。

そこへ、江井がやってくる。

江井、聡と真紀が一緒にいるところを見る。真紀が聡に腕をつかまれている。

江井「え？ え？ 水谷？ 水谷？ いつ着替えたの？ 泉田は？ どういうこと？ なにしてんの？」

聡と真紀、江井に気づく。

聡 「なんですか？」

江井、聡の顔を認める。

江井「あ？ てめー！ やっぱてめーか！ なにしてんだこの変態野郎！！」

聡 「え？」

真紀「ええ？」

江井、聡に向かって突進する。真紀を引き剥がそうとする。

聡 「うわっ！」

真紀「なんなの？」

抵抗しつつ、あっけにとられている聡。真紀。

そこに、泉田が戻ってくる。

聡、真紀、江井がもみ合っているのを認める。

江井、聡をバシバシ叩いている。泉田近づいていき、

泉田「江井！」

江井、聡を叩いている。泉田、さらに近づいていき、

泉田「江井！」

江井、聡を叩き続けている。泉田、江井の手を取り、

泉田「江井！ なにやってんだ？」

江井「え？ 泉田？」

江井、聡から手を離す。真紀を見て、

江井「え？ 水谷？ あなた水谷泉だよな？」

聡 「水谷？」

江井「どっからどう見たって水谷だもん。そうだよな？」

真紀「水谷って？」

江井「え？」

泉田「江井、間違えんな。水谷は俺だよ」

江井「え？」

聡 「ええ？」

真紀「はあ？」

江井、聡、真紀、驚いて、泉田を見る。

11

いわき駅東口前。長距離バス乗り場。翌早朝。

窓口でチケットを買っている客たち。カウンターで時刻表を見ている客たち。

カウンターの隅で手配書を片手に客たちの顔を確認している警察官。

窓際のソファに腰掛けている泉田、江井、真紀。それぞれ大きな荷物を脇に置いている。

泉田はソファにもたれて寝ている。

江井、真紀、(江井の) スマホを見ている。(テルミンを演奏している水谷の画像)

真紀「信じらんない」

江井「ホント、そっくりだよ」

真紀「うん。これ。これとか、すごい！ どう見てもわたしだよ」

江井「泉田と真紀ちゃんは似てないのにね」

真紀「…なんかショック」

江井「(笑って) 今度見に来てよ。毎週日曜やってるから」

真紀「…次、いつ来るかわからないけど」

江井「もちろん、来れたらでいいよ」

真紀「うん」

真紀、画像をワイプさせる。二人の演奏画像を見ていく。

真紀「演奏は、ずっと続けるの？」

江井「飽きたらやめるよ」

真紀「そっか」

江井「楽しめなくなったらやめる。…誰かが喜んでくれるわけでもないしね。」

真紀「…でも、わたしは感謝してるよ」

江井「え？」

真紀「泉田くんの女装のおかげで今回会えたし」

江井「そっか。確かにそうだね」

真紀「来てよかった」

江井「それ、泉田に言ってやって」

真紀、泉田の寝顔を見る。

真紀「絶対言わない」

江井、真紀、笑う。泉田、起き上がる。

泉田「ん？ なになに？ どうしたの？」

江井、真紀、笑い続けている。

そこへ、バス案内員がバス停から乗り場に入ってくる。

バス案内員「6時ちょうど発東京行き、6時10分発福島行きにご乗車の方は、バスが到着しましたので、ご準備くださいー」

真紀、荷物を持って、

真紀「わたし行くね」

江井「お父さん、送りに来ないの？」

真紀「朝から仕事だから」

江井「そっか」

泉田「俺らも行こう」

江井、泉田も荷物を持つ。三人、荷物を持ってバス乗り場の外に出る。

真紀「連絡するよ」

江井「うん」

泉田「またな」

真紀と江井、泉田、互いに手を振り合う。

荷物を持って、それぞれのバスに乗っていく。

12

日曜日の午後遅く。翌週。

いわき駅東口前。ペDESTリアンデッキ。

通行人が行ったり来たりしている。

デッキの端で、テルミンを演奏している水谷。

キーボードで伴奏している江井。

二人の周りには、まばらに人が集まっている。聡と千葉もいる。

水谷と江井の演奏が終わる。二人、頭をさげる。

江井「ありがとうございました」

パラパラと拍手が起こる。集まっていた観衆たちが散っていく。

水谷を見ている聡と千葉、残って拍手をしている。

水谷、聡と千葉に気づく。

水谷、江井、二人に頭をさげる。聡と千葉、挨拶して、去っていく。

水谷、江井、それぞれ自分の楽器を片付け始める。

その前を通行人が通り過ぎていく。

そこへ、男1、男2が通りかかる。二人は水谷の前を通り過ぎる。

男1は、泉田にそっくりである。

水谷、男1に気づく。驚いて男1を見つめる。男1、ふと、振り返って水谷を見る。

水谷、男1、黙ったまま見つめ合う。

江井は気付かずに楽器を片付けている。

先を歩いていた男2が、男1に呼びかける。

男2「おい。遅れるぞ」

男1「…ああ。ごめん」

男1、男2に追いつく。二人、歩き去っていく。

水谷「…」

水谷、男1の去っていった方を見ながら、その場に立ち尽くしている。